明珠

龍泉院
参禅会会報

55

平成23年4月8日

従容録に学ぶ（四八）

第一四則　廓侍過茶

〔示　衆〕

衆に示して云く、探竿は手に在り、影草は身に隨う。ある時は鉄にて綿団を裹み、ある時は錦にて特石を包む。剛を以て柔を決するは、則ち故より是なり。強に逢うて即ち弱なるは如何ん？

〔本　則〕

擧ぐ。廓侍者、徳山に問う、「従上の諸聖は、什麼処に去けるや？」（你が鼻孔裏に在り。）山云く、「作麼作麼？」（迅雷は耳を掩ぐに及ばず。）廓云く、「飛龍馬を勅点せるに、跛鼈が出頭り来れり。」（家富まば、児嬌らん。）山、便ち休去む。（饒人は是れ癡ならず。）来日、山、浴より出づ。廓、茶を過みて山に与う。山、廓の背を撫でること一下す。（断送いて竿頭に上す。）廓云く、「這の老漢、方始にして瞥地り。」（覆車は轍を同じゅうす。）山、又た休去む。（虎頭虎尾を一時に收む。）

本則の題名は「廓侍…」とありますが、前回紹介の主人公、巌頭さんの師匠、徳山宣鑑（七八〇～八六五）の力量がテーマの一則です。徳山は四川省で生まれ、長らく経律を学んだのち禅門に入り、石頭希遷―天皇道悟―竜潭崇信と連なる竜潭に法を嗣ぎ、湖南省武陵の大守に帰依を受け、徳山（常徳市武陵県）に道場を開きました。「徳山の棒」などの厳しい禅風は天下にきこえ、やや後輩になる臨済・洞山の両巨匠を批判していることからも、徳山の力量のほどが知られます。

『従容録』では三つの機縁が収められていますが、第二二則と第五五則はすでに紹介ずみ。今回は残る一則です。〔本則〕に出てくる廓侍者とは、臨済義玄―興化存奬―守廓と連なる臨済下二世の人。興化のもとで補作役の侍者であったため、廓侍者と呼ばれていた実力者。

さて、〔示衆〕も〔本則〕も意訳的なルビをつけましたから、表面的な意味はほぼおわかりでしょうが、前例のとおり一応要約します。まず、万松さんの〔示衆〕。

「探ったり隠れたり、軟硬の手段も自由自在。だが、剛で柔を制するのはたやすいが、強手に弱い態度で接してよいのかな？」

こんなところですが、むろん徳山という禅匠が雲水

を指導する自在な態度を讃えつつ、一見、弱腰ともみられる振舞いもよく味わってみな、という公案を投げかけているのですね。

次に〔本則〕です。

「守廓が仏祖のありかを聞くと、徳山はそんな世界ではなく、逆に一体仏祖とは何かと問いただす。守廓は負けずに、ここは天下の荒道場と思ったのにえらくアテが外れた、となお挑発したが、徳山はとりあわぬ。翌日、守廓が徳山に茶を差出すと、徳山は守廓の背をなでおろす。守廓が、やっと私の力がわかってくれた、といったとたん、徳山はまたもや引込んで取合わぬ。」

こんなニュアンスです。鼻は重要な器官ですから、万松のコメントは図星で、仏祖は君の大切ないのちそのものだ、という意味。また、俊馬と鈍馬の一句は、えらくアテが外れたことで、これは守廓による挑発の語。さらに、翌日に守廓の日常的な行動に対し、徳山がすこぶる優しい振舞をとると、守廓が「やっと・・・」といった語句に対する万松のコメントが面白い。同じハンドルの操作ミスで二度も転覆したと。現代にも通じる用語の妙。

ともあれ、この本則では、元気で威勢のよい守廓の言動に対して、徳山がトッサにその内面を見破り、一枚も二枚もうわ手の対応を示したところに中心があり、けっして弱腰だったのではないこと、いうまでもありません。それがつかめれば、一応万松さんからは及第だといわれるかもしれません。しかし、この公案は、もっと深いところに眼目があるのです。それは、いったい「仏祖」とはなにか、

常徳市賓湖公園に立つ北宋代の経幢

それは「日常生活の言動の中にはたらき出るものだ」という事実を、それぞれ体得すべきことにあると確信いたします。

「仏祖」とは、おのれの仏たることを自覚した人ですね。自分のいのちが仏であります。いのちのはたらきは、実に日常休みなく躍動している。道元禅師は、「この生死は、すなはち仏の御いのちなり」（生死巻）と示されていますね。つまり、私たちは誰でも仏になれる、いや、仏の自分を自覚できるのです。

わたくしが〝自分のほとけ〟をはじめて自覚したのは、大昔、永平寺での安居（あんご）修行があと三ヶ月という元旦から、毎朝ご開山道元禅師のご廟所、承陽殿にかけ上って大展三拝をした時の体験でした。これをはじめて約一ヶ月後、礼拝するわが身が自分でない尊い身に感じられ、その感覚が日ごとに高まり、さいごに山を下る日には文字どおり涙が滂沱として襟を浸し、感激のうちに永平寺を後にしました。

この体験は、私にとって生涯の財産になっています。自分のような無道心の者でも、礼拝という卑近な日常的実践を無心に続けると、いつしか宗教的浄心がわき出てくるさまを体得できたからです。それは、仏としてのおのれがあることの体験!!　坐禅も同じこと。常に後がないと思っての真剣勝負。そのとき、まさしく仏が仏としての坐禅を実践しているのですね。

相続は大難

―龍泉院参禅会四〇周年にあたって―

松戸市　小畑節朗

〝相続則大難大難〟、これは曹洞宗開祖洞山良价禅師のお言葉であります。

昨年一〇月、堂頭椎名老師は京都の臨川書店より、唐代の禅僧シリーズ七で三一〇余頁の大著『洞山』を上梓されました。右記の洞山さまのお言葉を、老師は歯切れの良い現代語訳で、

〝後の持続がとてものことじゃないぞ！〟

と訳されました。これは洞山さまがある僧に、「主中主」即ち自分の主人公（真の主体）を問い質した問答のなかの一齣で、洞山さまの答えのお言葉の一部であります。

相続という文字を見ると、私のような俗人はすぐ財産の相続をイメージしてしまいますが、佛法の相続や仏道の相続といった方が良いのでありましょうか。身心の行の相続では、伝える人・伝える事柄・受ける人の関係が考えられます。しかも時と場所、また人と人との縁で、千差万別で千変万化と、さまざまの関わり方が現出いたします。

〝伝える〟の言葉は〝教える〟とした方が良いとも思われますが、人は変われど〝伝える事柄（坐禅）〟は変わらない。しかも〝坐禅〟は伝える人にとっても受ける人にとっても、お互い自分の「主人公」を耕す一鍬一鍬なのであります。

今四〇周年を迎える龍泉院参禅会が、何故四〇年間継続されて来たのであろうかを考えて見ますと、堂頭老師が〝坐禅〟を中心軸に据えて、確実にご指導して下さったからであります。また持続する意思のお力です。

大学での研究の遂行、檀務、境内作務等等：に加えての参禅会です。毎月第四日曜日一回だけといっても、四〇年間で四八〇回。この間一回も中止されたことはありません。

享保一九年、第一五代象山和尚建立の茅葺旧本堂

小生は、昭和四九年にご縁を頂いてから三七年、以来老師が病気入院された時に一回だけ、止静・開静の鐘を打って欲しいとのご要請で、鐘を打った覚えがありますが、いつも通り坐禅は行われました。老師の提唱が無かったのはこの時一回だけです。萱葺きの旧本堂で、坐禅が行われていた昭和五〇年代の思い出であります。

加えて衆力和合です。『明珠』の参禅会簡介の参加資格に、年齢・性別など一切不問とあり、会則と称するものは、入会自由・退会自由の二項のみで無きにしかず、現在携わっておられる職業・仕事などは一切関係ありません。

〝来てもよし、来なくてもよし〟でありながら、四〇周年記念事業で坐禅堂建立が果たして実現できるのか？ これは「主人公」自己の真の主体の耕しに真摯に励んでいる集団、本当の和合衆であるからではないでしょうか。

今回、坐禅堂建立の委員会では、図らずも一級建築士の方がお二人、又棟梁まで会員のなかにおられたことでした。日頃は全く何の素振も感じさせない方々なので、驚いている

次第です。その外にも黙ってお力をいただいている方々は、枚挙に暇がありません。

話はかわりますが、この三月一一日、椎名老師と四〇周年記念実行委員九名で、八千代市の長福寺さま、結城市の孝顕寺さまと乗国寺さまの三ケ寺を訪れ、「坐禅堂」を見学し、さらに未曾有の大地震を体験しました。

午前に長福寺さまの見学を終え、午後二時に孝顕寺さまに到着、各委員が分担して、坐禅堂の内外を項目毎にチェックしている最中に、地鳴り共に大地揺動、収まるかと思いきや揺れは益々ひどく、立っているのがやっとでした。

境内に飛び出して周りを見れば、四五〇年を経たという楼門は、舟の如くギシギシと音を立てて揺れ、隣接の民家を見れば、木の葉が散るように瓦がバラバラと落下、参道の塀は大音響と共にバッタリ倒壊。まさに天翻地覆のありさまで、本堂や楼門は倒壊するのではないかと思われ、見守るすべしかありませんでしたが、幸い無傷ですみました。

このような状況で次の訪問は如何かとも思われましたが、約束をしていることもあり、乗国寺さまに向うことにしました。

乗国寺のご住職は所用でお留守でしたが、若奥さまが率先案内して下さいました。境内では大灯篭が倒れて参道を塞ぎ、本堂では漆喰が剥れて飛び散り、一部戸が外れ、天蓋が余震でゆらりゆらりと揺れていました。そのような中で老師は、本尊さまに平然と三拝されていました。余震の続く中、我々は単の高さ浄縁の巾などを、リストに沿って黙々と計測させて頂きました。

計測を終わった時、お茶は如何かとのお申し出を頂きましたが、遠慮申し上げた所、わざわざ各人にお菓子を下された上、門前まで見送って頂きました。この大地震中のご好意は、只有難く恐縮の極みでありました。

帰宅してテレビを見て仰天。前代未聞、想像を絶した惨状に絶句。日を追って未曾有の津波被害に言葉もない。地震の猛威は防ぐことが難しいにしろ、人智で災害を防ぐ道は無いものであろうか。被災者の一日でも早い救済と地域の復興を祈るのみです。

さて先日ある会員の方から、坐禅堂が完成したら、今までと違う更らなる活用を考えるべきではないか、とのご指摘を受けました。全くその通りであります。四〇年を単なる節目としてだけではなく、次の段階に向けて新しい一歩、即ち新しい世代への相続に踏み出さねばならない、とのご忠告と受け止めております。

このたび坐禅堂建立につき、会員の諸賢に参禅会発足以来始めて、勧募のお願いを致しました。その「趣意書」の中で〝なぜ今坐禅堂が必要なのか〟を申し上げましたが、根本は「己の未だ度らざる前に一切衆生を度さん」という菩薩の誓願であることを訴えております。高祖道元禅師の教えの如く、「至らぬ自分は生涯修行を続けるけれど、その過程で他人には一歩先に手を差しのべよ」の念いであります。

お釈迦さまに始まり、達磨大師が中国に、そして道元禅師が我が日本に伝えられた正伝の佛法、即ち正伝の坐禅は、〝自未得度先度他の誓願〟を基として、断絶させることなく、次ぎの世代に相続させなくてはなりません。〝大難〟ではありますが、今、此処で切に念じかつ行じて行きたいものであります。

毎朝佛祖諷経でお唱えする洞山さまの『宝鏡三昧』の最後は、「潜行密用は、愚のごとく魯のごとし、只能く相続するを、主中の主と名く」と示されております。「相続」のこと、しっかり肝に銘じて次ぎの一歩を進めたく存じております。

合掌

一五代住職象山和尚に学ぶ

―第二八回成道会―

お釈迦さまが明けの明星を見られて、お悟りを開かれ、人間から釈尊になられたのが一二月八日です。参禅会ではお釈迦さまの成道を記念して、昭和五八年から毎年成道会を行い、今回で二八回目を迎えることになりました。

今回は一二月五日（日）午前九時から、三一名が参加して催されました。最初にお釈迦さまの成道を讃える二炷の報恩坐禅。次いで梅花講の大聖釈迦如来成道和讃奉詠、法要（成道会香語奉読、般若心経の読経）が厳粛に行われました。この後、ご老師と参禅会員との問答、ご老師の法話、記念写真、点心（昼食）、茶話会というスケジュールで行われました。

法要のあとの問答では、参禅会員が日頃疑問に思っていることや悩んでいることを、ご老師に直接質問をするもので、会員とご老師との真剣な求道の場となっています。今年も一〇名の方が真摯な質問を発し、これに対してご老師からは簡潔にして、しかも適確なお答えがありました。

引き続き今泉ご夫妻の二〇年にわたる弁道を祝して、ご老師より「閑不徹」と揮毫された額が今泉房子さんに授与され、大きな拍手がわきました。

この後ご老師から、龍泉院歴代のご住職のうち、一五代目に当たる象山和尚について次のようなお話をいただきました。

享保九年（一七二四）、象山さん三三才の時に龍泉院住職に任命されましたが、当時の龍泉院は、前の住職が残した借金が二〇両もあり、伽藍もたいそう疲弊しておりました。象山和尚は朽ちた本堂を建て直そうとしましたが、檀家はわずか四〇数軒にすぎなかったのです。やむなく象山さんは自力で本堂の建て直しに取り掛かることになりました。

そこで象山さんは如意輪観音像を背負って、享保一五年から一九年にかけて、上総・下総・常陸・安房の四ヶ国で出開帳説法を行いながら、浄財を集め廻ったのです。当時は観音信仰が盛んだったので、各地の寺院や名主の協力が得られ、無事浄財を集めることができました。

象山さんの五年間にわたる説法活動と、多くの村人の奉仕活動、および材木の寄進などにより、念願の本堂と庫裏が完成し、参道の整備も行われ、完工より一四年目の延享四年（一七四七）の春、四日間にわたって落慶法要が行われました。象山さんは工事中、地蔵経を毎日一千回お唱えし、そのお陰で早く本堂を建てることができたとして、地蔵菩薩を一体建てられたのです。それが山門脇の六地蔵のそばに立つ地蔵尊です。

象山和尚が建立された納経塔

さらに象山さんは『法華経』を納める納経塔を庭に建立しました。納経された『法華経』のうち「方便品」「如来壽量品」「如来神力品」「観世音菩薩普門品」の四つのお経の全部の文字を、石に一つずつ書き、それを六〇個の袋に入れ納経塔の地下に埋めたという記録が残されています。

嘉永年間に納経塔の修復をした時には、塔身に納められていたお経は全てだめになっていたようで、その後は何もなくなっていました。参禅会員であった北岡さんの息子さんが、このことを聞き、母親のご供養として、京都の貝葉書院に木版手摺りの『法華経』全八巻を依頼され、奉納されました。

本堂を再建された再中興の一五代住職象山和尚は七〇歳で示寂されました。ご老師が象山和尚のことをいろいろ調べられている中で、たまたま昨年（二〇一〇）が象山和尚二五〇回忌にあたることを見つけられたそうです。これも仏縁の一つかもしれません。因みに、椎名老師は三一代目の龍泉院住職にあたり、昭和五六年三月に現在の本堂を再建されました。

本年は龍泉院参禅会四〇周年にあたり、色々な記念行事が企画されており、その中で坐禅堂建立はメイン事業となっています。象山和尚や椎名老師の本堂建立の熱い思いを引き継いで、参禅会としては坐禅堂建立プロジェクトを立ち上げていますので、皆様方のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

写真とこころ（二）

取手市　三町　勲

「春は花夏ほととぎ秋は月　冬雪さえてすずしかりけり」

道元禅師の『傘松道詠（さんしょうどうえい）』の一首です。川端康成が、ノーベル文学賞受賞の記念講演で引用されて、知られるようになったものです。この一首は「あるがまま・そのまま」の実存の「真如（タタタター）」であると言われています。

「よく見ればなずな花さく垣根かな」と詠じた芭蕉が見たのも、この「真如」です。

■　花の写真で『写真のこころ』を深化

花は我々に四季の空気を伝えてくれるし、宇宙の鼓動を如実に知らせてくれます。写真のこころは、この花の息吹きを掬い上げ永遠の花の心を影像化する作業です。

花は美し過ぎて自分自身が花に負けてしまうと、「真如」を掬い取ることが出来ません。また、花の囁きが耳に飛び込んでくることがあります。「きれいに撮って！」とか「私も取って！」と囁きかけてきます。

写真家としては、イメージを大事にします。「イメージ」とは「悟りに入る道」であり、「無位の真人」に入処することです。

玄沙師備禅師と修行者の次の問答がある。

「悟りに入る路をお示し下さい」と。玄沙師備はじっと耳を傾けて後、「あの谷川のせせらぎが聞こえるか」、「聞こえます」と僧は云った。禅師は、「それがおまえの入処だ。そこから入るがよい」と。（伝燈録巻一八の一節）

つまり、大自然の中から悟りへの入処を掬い取れと直指(じきし)しています。「イメージ」（「無位の真人」）は「見るところ、聞くところ、思うところ」に、常に存在しています。しかも「無位の真人」は、常に、我々の面門から出入りしているのです。

この「見るところ、聞くところ、思うところ」を素直に掬い取り、影像化するのです。

■ **「一顆明珠」が「イメージ」をつくる**

花の花弁に一滴の水滴を配します。その球状体の中に、客体の花の中に、もう一つの別な世界が形成されます。この世界の中に周りの花がけなげに写し込まれます。「一顆明珠」の世界が創出されるのです。それが「写真のこころ」を鼓舞してくれます。

『彩　玉』

その水滴に焦点を合わせ、シャッターを切る気持ちは格別です。自分自身が「一顆明珠」の世界に吸い込まれて行く気持ちは、言葉では表現しようもありません。

写真『彩玉』は上野美術館で開催された「新院展」（新人賞受賞）の出品作品です。

絵画でも写真でも、作品を支えるダイナミズムに、流れるような宇宙のリズムが重なり、細部（ディテール）の輝きが全体を象徴させ、作品の奥にある別の次元へと見るものの想像力を誘いこみ、過去と同時に未来に出会わせてくれます。時空を超えた求心的な力がモニュメンタリテーであり、影像美でもあります。

その凍結された世界観が、語りかける物語の豊かさであり、その象徴とするものの奥深さ、生の底流に流れる永遠性への憧憬を、満足させてくれると言えます。

■ **美の象徴は黄金分割**

ルネッサンス時代の美の象徴は、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画の中に見る黄金分割です。物の配列や遠近法の精緻な表現に多用しています。これが宇宙のリズムなのです。これは楽器の音階（弦の長さ）も同様に、この法則で設定されています。

自然に対しても人間に対しても、さらに聴覚に対しても視覚に対しても、心地よいリズムが存在しているのです。まさに不思議なことであり、改めて宇宙の神秘に脅かされます。

写真『彩玉』を例にしますと、

①右下の角から花の茎が、左上角に向って斜めに伸びている。この構図が画面を引き締めています。これが基本です。

②この写真の主体は左手の水珠です。水珠と画面の右端までの距離と、水珠と花蕊(かしべ)の中心までの距離とは黄金分割です。この二つの距離は、ほぼ五対三にしてあります。また、花の茎の立ち上がり点から水珠までの距離と、花の茎の立ち上がり点から花蕊の中心までの距離との比も、黄金分割です。

この構図がさらに全体のバランスをキッチリと決めてくれます。

■ **写真のトリミング作業**

撮影した写真は、一旦フルサイズにプリントし、撮影画面を厳密に点検し、写真の首題に不必要なゴミを除外した画面設定をしま

す。つまり、有効画面をトリミング鉛筆で囲いこみます。写真『彩玉』を例にしますと、①右下の角から花の茎が立ち上がるように、写真の右端と下端に線を引きます。②それと同時に右端と下端位置を微調整し、上述したような黄金分割のことも配慮しながら、左端と上端を決めてトリミング線を書き込みます。囲い内が作品です。

■ **芸術の必要条件は感性**

写真家は感性を大事にします。絵画でも同様です。黄金分割は名画を分析し、数学者が割り出した経験則です。レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめ、有名な画家は感性の中に黄金分割の感覚が埋め込まれていたのでしょう。今の言葉でいえば、頭脳の中に前記のようなソフトがメモリーされていたと推測されます。

われわれの写真仲間の中でも、感性がある人はどんどん伸びて行きます。「あの人は感性がある」と、よく耳にします。

しかし、私は感性プラス努力の積み上げが、魅力的な写真を創作すると思います。

いまの一当は百不当のちからなり、
百不当の一老なり。

『正法眼蔵』「説心説性」

何百回の失敗や努力がフッと熟成した時、「悟りに入る道」に入処するのだと、道元禅師は教えています。

（次回に続く）

プラスはマイナスのお蔭

我孫子市　清水秀男

一、江戸時代後期の国学者に塙 保己一（はなわ ほきいち）（一七四六～一八一一）がいる。保己一は、七歳の時病気で全盲となりながらも、それを克服し『群書類従』という、古代から江戸時代初期迄の古文献の大叢書を編纂・刊行するという、文化的偉業を成し遂げた大学者である。

『群書類従』は、各地に散逸している史書や古典等の貴重な一二七七点の書物を集め、内容を厳密に吟味・校訂し、二五の部門に分類し、四〇年をかけて約一七二四枚の版木におこし、全六六五冊（別に目録一冊）に纏めた、日本最大の国書の叢書である。

編纂の趣旨は、後の世の国学を志す人々の、よき助けになるようにと、私心を超えた保己一の考えによるもので、『群書類従』のお蔭で、多くの人が日本の歴史や文化を理解する上で、大きな助けになっていると言われている。

そして、全盲という身体障害・偏見・差別に苦しみ、一六歳の時、自殺未遂に追い込まれながら、師匠の包容力と多くの人の温かい支援を糧に、マイナスを飛躍台にプラスに転じ、学問の道に進み、大事業を成し遂げた保己一の生き様は、障害者を含め、多くの人に夢と希望と勇気を与え続けている。

特筆すべきは、三重苦の重い障害を背負いながらも、世界各地を歴訪し、身体障害者の教育・福祉に尽くしたヘレン・ケラーが、保己一を尊敬し、人生の目標にしていたことである。

二、保己一の伝説的逸話は多いが、その中で印象に残り、感銘を受けたものを挙げてみたい。

ある雨のふる日、保己一は、日参していた江戸平河天満宮で、下駄の鼻緒を切ってしまったので、境内に住んでいた版木師の所に行き、鼻緒をたてて欲しいと頼みました。ところがその版木師は「按摩のくせに」との侮蔑した気持ちを拭いきれず、布切れではなく、銭の穴に通す〝さし〟の縄を投げ与えたのです。

保己一は道を這い回り、手探りでやっとそ

れを見つけ拾いましたが、何を思ったか、それを手に持ち下駄を脱ぎ、職人らの罵りの声を背に、くやしさに堪えながら裸足でその場を立ち去りました。

後年、『群書類従』を出版するため版木師を選ぶ段になって、保己一はためらわず件の版木師に依頼したのです。

版木師は、高名な学者の保己一から、何故ちっぽけな版木師に依頼があったのかと驚き、質問しました。それに対して保己一は、版木師に昔 投げ与えられた〝さし〟の縄を出し言ったのです。

「あの時恥をかかされたお蔭で、奮発心をさらにあらため、修行に励んだ。その結果、今日の私がある。その恩人に、お礼の意味を込めてお願いするのです」と答えたという。

三、受けた屈辱を怨みと思わず、怨みをぐっと飲み込み、やる気と感謝のエネルギーに転化していったことは、何と爽やかな素晴らしい人間性に基づく行動であろうか。

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以ってしたならば、ついに怨みの息(や)むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である」『法句経』「第五番」の釈迦の教えを体現すると共に、その怨みを感謝の世界にまで 昇華している点に、保己一の心境の深さがある。

では、保己一は、どの様にしてその様な境地に到達したのであろうか。

その一つの要因として、自殺未遂後、師匠の温情によって、学問の道が開かれたことを契機に生まれ変わり、再起の糸口として『般若心経』の教えに出会ったことが大きいと思われる。『般若心経』によって「人間の幸せとは何か」「人生如何に生きるべきか」を学び、毎日百遍唱えることを決意し、死の直前まで続けたという。

この「かたよらない・こだわらない・とらわれない心」の毎日の練成が、保己一を内面から成長させ、人々に対する「感謝」を大切にし、自利を捨てて世の中の為に尽くす「誠」を醸成していったと思われる。

四、保己一の生き方に学ぶものが多いが、その中でも物事を捉える場合、角度を変えてみることの大切さを学びたい。例えば、逆境や失敗や病気をマイナスとして捉え、自暴自棄になってしまうのか、逆に生きる糧にしてプラスとして前向きに捉えるかで、その人の人生の輝きが大きく変わってくることを・・・

ある娘(恵)さんが大学受験に失敗した時、父親が自分の体験を踏まえて娘さんに言った言葉は、含蓄深く心 打たれたので紹介したい。その言葉によって、娘さんが失敗のショックから立ち直ったという。

「恵、おめでとう。いくらお金を積んでも、いくら望んでも得られない尊い勉強をさせていただいたね。お父さんはね、失敗した時、これはきっと仏様が、お父さんの一番の問題点を涙ながらに教えて下さっているのだと信じて、失敗を大切にしてきた。そして、その失敗のお陰で、と言えるようになるまで頑張ってきた。恵、いくらお金を積んでも、いくら望んでも得られないこの度の失敗、どうか一生大切にするんだよ。それと一緒に、自分が得意の絶頂に立った時、どこかで泣いている人がいるということを考えられる人間になっておくれ」(『かおり』四五〇号「物の見方、とらえ方」から)

五、私も病を得て四年が経過した。昨年の八回目の手術のお蔭で、元通りとはいかないが、少しずつ回復に向かいつつある。「病は善知識」、病のご縁で多くの学びをさせて頂いたことを有難く感謝している。そして、保己一の生き方に万分の一でも学び、今後の人生に生かしていきたいと思っている。

拙いながら、現在の所懐をまとめてみた。

「人生は、思わぬ病気・失敗・災害・挫折等、不幸（マイナス）が襲う。不幸にうちひしがれることなく 見方を転換、それをバネにして倦まず弛まず努力すれば、いつの日か福（プラス）が訪れる。

マイナスはプラスの因、努力はプラスへの縁。そして努力は人を裏切らない。プラスの山は、マイナスの谷が深い程高い。プラスは マイナスのお蔭と マイナスに感謝。そして人生しめてみれば、プラス・マイナス・ゼロ」

以上

歳末助け合い募金の托鉢に初参加

我孫子市　太田　俊雄

「寒かった！」

これが、歳末助け合い募金の托鉢を終えた率直な感想である。

托鉢は、例年この時期に曹洞宗千葉県第二教区により柏駅前で行われている。自分は参禅会に参加して間もないので、禅をできるだけ幅広く体験したく、この托鉢行に初めて参加した。

参加者は、総勢三〇数名である。龍泉院から椎名ご老師と参禅会の諸先輩七名、第二教区の僧侶の方々である。一二月一八日土曜日一二時に柏の長全寺に集合した。寺内の本堂で『般若心経』を全員で読経。胸には、杉浦さん手造りの「浄財」と記した箱を下げ、「歳末助け合い」の幟を片手に持ち、托鉢姿の僧侶を先頭に一列縦隊で柏駅へ向かった。それなりの厚着など思いつく防寒対策をしたので寒くなく、心身とも準備したつもりであった。

駅東口デッキへ着くと何組かに分かれる。自分の組は、駅出口からビックカメラまでの通路に、工事中の塀を背として、四、五メートルおきに並んで立った。工事の削岩機の音が響き、ビルの谷間に午後の陽射しはない。自分はある托鉢僧の隣に立ったが、立ってみて初めてどういう顔と姿勢で、どこを見て、どうすればよいか、はたと迷った。行動してから考えるいつもの癖が出た。

以前見た托鉢僧の姿が頭に浮かんだ。彼は、大きなお椀の蓋をひっくり返したような笠をかぶり、左手に鉢、右手に鈴を、そして雑踏の中でじっと立っていた。

話は変わるが、自分がやっている武道の一つ弓道では、立つ姿勢が決められている。両足は三～五センチの間隔をあけ、平行に揃え（女子はくっつける）、項をまっすぐに伸ばし、耳たぶが両肩におちるようにして、軽く口を閉じ、目は鼻頭を通して、約四メートル先に注ぐ、など。

これは禅と似ている。そういえば弓道は立った禅、立禅（りつぜん）というのを聞いたことがある。姿勢、目線はこれでいこう。後に隣や真向かいの僧、先輩をチラッ、チラッと拝見すると、違和感がないことを確かめた。

こうして立っていると、目前を右へ、左へ、華やかなファッション、色彩、ベビーカー、ビラ配りの若者、ペット、ビックカメラの電気製品などが通り過ぎる。注いだ目はクラクラ、チカチカ。足を「休め」の姿勢もとれず、きつい。そのうち隣の僧が読経しているのに気づく。自分も真似をして『般若心経』を口の中でひたすら繰り返した。これで少し気が紛れた。

落ち着いてくると、隣の僧に喜捨する人々がいるのに気づいた。自分は立っているだけ。気落ちするが、比べてみると、姿・衣装・持ち物など「仕掛け」が全然違う、鈴の音も人々を引きつける。相手は専門職だし、まあしょうがないかと納得。

あるご婦人が、自分の前あたりで「どこへ入れても同じなんでしょう?」と言いながら、面前を通り越し隣の僧へ喜捨。勝手にしてくれ。オッと失礼!

総じてみて、隣の僧への喜捨の回数は、自分と比べ一桁以上違うと感じた。突然、視線上に女性の微笑みの顔が現れ、自分の箱にチャリン、合掌して立ち去ろうとする彼女に、慌てて感謝の意を示しつつ合掌、嬉しいものである。

そうこうしているうちに、冷たい埃混じりの風が吹き始め、じっとしているので、益々寒さが身にしみる。足、腰、体全体を少しでも動かせれば血の巡りも生じるだろうに、固まった感じ。弓道でも、立つ姿勢を保つのは長くともせいぜい一時間である。

三時半の終了の知らせを受けたが、両足がなかなか思うほどに動かない。膝が曲らないのである。恐る恐るロボットのようなぎこちなさで歩き、それでも来たときと同じように一列になって長全寺へ戻った。

そこで頂いた温かいうどんがありがたく、疲れを癒してくれた。形ばかりを真似たような今日一日であったが、無事終了できたことに感謝した。

四〇周年記念行事実行委員会 活動報告（二）

毎月一回のペースで委員会が開催され、今年の二月一九日（金）で一〇回目を数えました。委員には新たに中嶌宏誠氏と小畑二郎氏が加わり、毎回、記念行事の企画・運営と坐禅堂建立について、検討を行っております。

前号では記念行事として「眼蔵会」「記念講演会」「在家得度式」を行うことをお知らせしましたが、今回は「眼蔵会」と「記念講演会」の概略をご報告します。詳しくは二月の参禅会でお配りしたお知らせや龍泉院参禅会HPをご覧ください。

「眼蔵会」

五月一四日（土）～一五日（日）の二日間にわたり、龍泉院大悲殿で行われます。眼蔵会とは、道元禅師が撰述された『正法眼蔵』を講ずる会で、大本山永平寺では明治三八年五月、丘宗潭師を講師に拝請し第一回目の眼蔵会が開かれ、今日まで連綿と厳粛に執り行われています。

龍泉院の参禅会では、毎回、椎名老師より『正法眼蔵』のご提唱をいただいていますが、あらためて威儀を正し、道元禅師の教えに対して敬虔の念を表して、椎名老師のご提唱を拝聴いたします。今回の眼蔵会では、昭和五六年三月から一〇回にわたってご提唱された「現成公案」の巻を、改めてご提唱いただきます。「現成公案」の巻は『正法眼蔵』の中でも特に白眉といわれ、在家人にお説きになられた一巻でもあります。一般の方も拝聴できますので、ご家族や知人にもお声をかけていただき、親しく拝聴して法益を共に致したいものです。

「記念講演会」

五月一五日（日）、午後二時より、文学博士・駒澤大学名誉教授佐々木宏幹先生をお招きして、「仏教の力―その現代的意義―」と題してご講演をいただきます。佐々木先生は宗教人類学の第一人者で、宗教文化論に関する著書を多数上梓されています。

『明珠』五〇号にも「坐禅力」と題して特別寄稿をいただきましたが、今回は先生から直接お話をお聞きすることができる機会であります。記念講演会も一般の方が参加できますので、ご家族・知人・友人などにお知らせください。眼蔵会、記念講演会とも受付は先着順となっています。参加ご希望の方は葉書でお早めにお申込みください

◇◇会員便り◇◇

●二月六日（日）うどん市で新年会がおこなわれ、二三名の方が参加されました。三町さんの乾杯のご発声で宴会が始まりました。少し歓談した後、参加者全員から坐禅堂建立に対する抱負や今後の人生の目標などが、熱く語られました。四〇周年の最初の行事として、大変盛り上がりました。

●二月一五日（火）午後二時より梅花講との共催による涅槃会が行われ、五名の方が参加されました。前日の大雪で境内の木々に積もった雪が、早春の陽射しを浴びてまぶしく輝いていました。本堂に掛けられている大きな涅槃図は、正徳五年に制作され、徳川四天王の一人であった本多公からの喜捨で調達されたものであるとのお話が、ご老師からありました。

龍泉院参禅会簡介

〔定例参禅会〕

・**日　時**　毎月第四日曜九時（初参加の方は八時半）

・**坐　禅**　口宣、坐禅、経行、坐禅の順
（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）

・**講　義**　木版三通、開経偈、『**正法眼蔵**』提唱

・**座　談**　自己紹介・喫茶・座談、正午解散

・**参加資格**　年齢、性別など一切不問、初心者には懇切に指導

・**会　費**　無料

〔年間行事〕

・**一夜接心**　本年は六月四～五日、七炷の坐禅と提唱等

・**成道会**　本年は一二月四日、坐禅・法要・問答・法話・点心等

・**四〇周年記念行事**　眼蔵会（五月一四～一五日）、記念講演会（五月一五日）、在家得度式（一一月三日）

・**他の行事**　涅槃会（二月一五日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）手伝い、歳末煤払い（一二月例会後）

・**作　務**　毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

・**刊行物**　『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）、『口宣』（年一回）

［**ウェブサイト http://www.ryusenin.org/**］『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます。

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】
（　）内は座談の司会者

平成二二年

●九月二六日　三一名
（遠藤　登　氏）

●一〇月二四日　二九名
（太田　俊雄氏）

●一一月二八日　三〇名
（徳山　浩　氏）

●十二月五日　三一名
成道会
幹事　小畑　節朗氏
加藤　孝　氏
田上　淳一氏

●十二月一八日　八名
歳末助け合い托鉢
於　柏駅前

●一二月二六日　三五名
（小畑　二郎氏）
年末煤払い

平成二三年

●一月二三日　三六名
（逢坂　国一氏）

●二月六日　二三名
新年会
於　うどん市

●二月一五日　五名
涅槃会

●二月二七日　四六名
（刑部　一郎氏）

【奉仕作務】
九月　三日（三名）、一一日（五名）、一七日（二名）
一〇月　一日（三名）、九日（二名）、一五日（二名）
一一月　五日（四名）、一三日（二名）、一九日（三名）
一二月一一日（五名）、一七日（四名）
一月　七日（三名）、一五日（二名）、二一日（五名）
二月　四日（三名）、一二日（二名）
三月　四日（五名）

▼三月一一日にM9・0の東日本巨大地震が発生し、津波による死者・行方不明者は、最終的には数万人に上ると見込まれる。また、東京電力福島第一原発事故により、超高濃度の放射能が拡散する恐れがあり、半径二〇kmの住民には避難指示が出た。巨大地震の余波を受け各地で地震が相つぎ、この先どこまで災害が拡大するのか先が見えない。冀う所は災障消除ならんことを。（秀嗣）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県柏市泉81　☎04（7191）1609
●印　刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116―45　☎04（7143）3131